

理研百周年・BSI20周年記念シンポジウム「脳科学と社会の未来」開催報告

2016年12月10日、コクヨホールにて行われた理研百周年と脳科学総合研究センター（以下BSI）20周年を記念するシンポジウム「脳科学と社会の未来」は、会場参加者約300名、ストーリーミング視聴による参加者延べ450名と盛況のうちに終了しました。会場には理研の100年にわたる発展とBSIの20年の歩みを紹介する年表や、参加者からのコメント・質問を掲示する「コメント広場」などが展示され、注目を集めました。シンポジウムは松本 紘 理研理事長のあいさつで幕を開け、続いて登壇した文部科学省 戸谷一夫 文部科学審議官（現・文部科学事務次官）がBSIが発足した当時を振り返りました。

利根川 進 理研BSIセンター長による「理研BSI20年の歩みと未来の展望」では、初代センター長である伊藤正男氏の尽力により設立したBSIが、2代目センター長 甘利俊一氏のもとで国際的な地位を確立し、3代目センター長である利根川氏が進めた改革を経て、世界の脳科学をリードする研究機関へと成長した歴史を紹介しました。また近年の著しい研究費の削減など日本の脳科学が直面している問題にも触れ、将来への危機感を示しました。最後に、記憶や親子関係の脳メカニズムなどBSIの研究成果をいくつか紹介し、脳の基礎研究が私たちの社会や生活と密接につながっていることを強調しました。

第2部の講演会では、京都大学の伊佐正教授とサイエンス作家の竹内 薫氏による進行のもと、東京大学 宮下保司教授、東京大学 合原一幸教授、高知工科大学 西條辰義教授、京都大学 山中伸弥教授、BSI西道隆臣チームリーダー、BSI宮脇敦史 副センター長が講演を行いました。

「脳科学に期待すること」と題したパネルディスカッションでは、利根川センター長と講演者6名に、九州大学 神庭重信教授、東北大学 大隅典子教授、BSI岡本 仁、加藤忠史 両副センター長を加え、意識・心・個性といった難問から、精神・神経疾患の克服、AIと脳の未来といった社会の関心が高い問題まで、活発なディスカッションが行われました。参加した学

生から寄せられた「脳科学に進みたいが、日本の現状は？」「日本の脳科学が世界で抜きでるには？」という質問に、前日まで米国にいたという山中教授は「米国は研究者の社会的地位が高く、富裕層の寄付が政府だけでは支えられない研究を支えている」と述べ、研究に対する社会の期待の違いを指摘しました。利根川センター長は「日本の脳科学はいい線いっているが、層が薄い。イノベーションへの投資に偏り、基礎研究が先細っている現状では、研究者を目指す若い人たちの意欲がくじかれてしまう」と危機感を示しました。「これは生命科学全般で起きている

現象」と山中教授は視点を広げ、すぐに成果の出ない基礎研究も政府の資金や民間の寄付で支えて国の力にすることの重要性を説きました。

最後に竹内氏が「科学は楽しい」と発信し、子どもたちが科学に興味を持てるよう裾野を広げていくことが大切だ」と述べると、伊佐教授も「懸念はもちろんあるが、サイエンスの未来は明るいと感じている。われわれ研究者は、皆さんの期待に応えるべく、脳研究を力強くけん引していかなければならないと感じている。ぜひこれからも脳科学研究を支えていただければ」と締めくくりました。



シンポジウム終了後、記念の一枚。



会場を埋める参加者の皆さんとパネルディスカッションの様子

※シンポジウムの詳細レポートならびに一部ビデオはBSI 創立20周年特設サイトをご覧ください。

<http://www.riken-bsi20.jp/>

